

口で紐解けば日暮や西行忌

藤田湘子

私は二十代の頃、俳句は芭蕉のように五十、六十になり悟りを開いてから始めるものだと考えていた。そして、俳句よりもつとイメージを膨らませる短歌がいいと思えば塚本邦雄に私淑していた。塚本が藤原定家を評価していたのも好ましかった。和歌では、三夕の歌として有名な、定家の「見渡せば花も紅葉もみぢもなかりけり浦の苦屋とまやの秋の夕暮」と、西行の「心なき身にもあはれは知られけり嶋立しまぎつ沢の秋の夕暮」が気に入っていた。

俳句初学の頃、湘子の俳句の良さが全く分からなかった。そして、初めて良しと思えたのが掲句であった。心象の中で、風呂敷の結びを今しも口で解こうとしている旅人、芭蕉の姿が浮かび上がったからに他ならない。